

Title	辜顯榮(同翁傳記編纂會編並發行)
Sub Title	
Author	武田, 勝藏(Takeda, Katsuzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1940
Jtitle	史学 Vol.18, No.4 (1940. 4) ,p.219(781)- 220(782)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19400400-0220

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

特に赤松劔吾なる變名を用ひた。文化十四年、讃岐國金刀比羅山麓の榎井村の豪家加島屋に生れ、家は代々質商を營む。燕石、生來、好學俗塵を脱し、殆んど家業を顧みず、義に篤く人の難を見て救はざるなく、青年にして、既に「長次郎親分」の名近郷に高く、博徒の群を顧使して一方の雄となつた。又同志と共に普く天下を周遊して幾多の佳詠名賦を残し、又其の間幾多の俊傑と交遊して國事を談じ、維新回業の志士とは絶えず氣脈を通じ、殊に四方志士の難を四國に避けるや、燕石の庇護を受くる者多く、就中慶應元年四月高杉晉作を潛居せしめ、藩吏の捕縛に向ふと聞かや、機智を以て危難を脱せしめしことなどは人口に膾炙せられる。其年閏五月、藩獄に投ぜられ、囹圄にありても、猶ほ時弊を痛歎し、詩文に托して慷慨の情を述べ、同四年正月出獄するや、高松藩の朝敵汚名の雪辱に奔走し、五月同志木戸孝允等の招によりて上洛、次いで天杯を拜受し、孝允と共に各所を巡周して勤王を説き、更に仁和寺宮嘉彰親王の總督として北越平定に進發に際し、擧げられて軍務官日誌方として隨從し、士卒と共に彈丸雨飛の間を馳驅し、偶々征途の半にして柏崎にて遽かに疾を發し、遂に八月十五日陣歿す。享年五十有二、總督宮深く哀悼せられ、特に諡を大櫻定居彦と賜ひ、厚葬せしめらる。次いで明治二十四年靖國神社に合祀、三十六年從四位を追贈の恩命に浴した。燕石遺稿多く十春詞、皇國千字文等十數種あり、大正十二年香川新報社より日柳燕石全集を上梓さる。

終に最近、燕石の劇化・映畫化が企畫される際に、正しき傳の公刊せられしを喜ぶと共に、筆者相原氏の燕石の皇道精神の發揚

と其の遺業顯現に盡瘁せらるゝに感銘し、改めて敬謝の意を表して擲筆する。(昭和十四年九月十一日武田勝藏)

辜 顯 榮

(同翁傳記編纂會編並發行)

本書は臺灣の偉人故辜顯榮翁の行實である。翁は慶應二年臺中州鹿港の名家に生まれ、早く父を失ひ慈母の手により哺育せられ、夙に家人郷黨より將來を囑望せられ、二十九歳の時、家兄の計に遭ひ、家業を承けた。明治二十八年日清戰役の結果臺灣の我が領有に歸するや、五月急遽と上海より歸臺し、治安恢復の爲め臺北に皇軍を迎ふるに努力し、翁の我が國民としての奉公は茲に始まつたのである。即ち六月始め臺灣巡撫唐景崧の軍が基隆に於て皇師に敗北し、臺北に退却するや、城内は無秩序となり掠奪行はれ、物情騒然として島民殆んど其の歸趨に迷ひし時、當時三十歳の翁は奮然單身にて基隆の我陣營に馳せ、一日も早く皇軍の臺北入城を懇願したるに、幸、水野民政局長に其の眞意を認められ、且つ義民と稱せられ、其の願望は容れられ、我が軍は翁の嚮導にて一兵卒を損することなく、入城するを得たのである。次いで北白川宮能久親王の南進に際して樺山總督の命により鹿港に奉迎し嘉義まで扈從し、又臺北總局長・鹿港保良局長に任せられ、良民の保護、暴民の鎮撫に努力した。獄ほ能久親王の御病軀を押し進軍の際御使用の御轎は翁の獻じたるものと云ふ。後、征臺の役終るや、勳功により島民にして勳六等に敘せられ、賢所參拜さへ許さるゝ破格の光榮に浴した。こは一視同仁の聖恩、新附民人に至大

の感化を與へしものである。又日露戰役に際しては命により戎克十二隻を以て海峽を日夜警邏せしめ、糧餉を滿洲に送り勳功多く勳五等に叙せられ、大正三年、多年殖産興業の開發に盡瘁せし功績を以て勅定藍綬褒章を、四年即位の大典に島民の代表として参列、勳四等に、十二年今上陛下東宮として始めて鶴駕を南島に枉げさせられし節、更に島治功勞者として勳三等授けられ、且つ御尊影を拜受した。昭和三年即位の大禮に参列し、九年七月島民として始めて貴族院議員に勅選され、國政翼贊の重責に任じた。時に島民は擧げて皇恩に感激し、祝意を表したと云ふ。十二年秋病を獲て、十二月九日遂に逝去、生前の功績を嘉賞せられて特に從五位を追贈せられた。年七十有二翁、歴代の總督の信頼を得て島治に参劃し産業の興隆に努力し、文教に盡瘁した。又孔教振興の爲め臺北に聖廟の建築を贊同し數萬圓を寄附せしを始め、各方面に多額の金圓を寄附せられた。

余、翁の警咳に接する機會を得ざりしも、本書により翁の内臺共存共榮に終始一貫努力し、國家に貢獻の勳功尠からざりしを知り得たことを悦び、又翁の嗣子辜振甫氏は既に最高學府に業を修め、遺志を承け、遺業を繼がれしを以て増々島治殖産興業に盡力し愈々家名を擧げられむことを切望して本書の紹介を擲筆する。

(昭和十四年十月十六日 武田勝藏)

Studies in Early Chinese Culture,

by Herlee Glessner Creel, London,

1938

シカゴ大學の支那文學の助教授たるクリール氏の良心的な研究業績である。考古學論叢の中に梅原氏が指摘した如く、氏は最近支那學者の業績に關心を持ち本邦學者の研究には目を通すこと少い。然し支那學者の説の單なる受賣りでは無く、一々之を検討し、極めて注意深く、支那最古歴史文化の真相を發かうとてを。氏は神話の方面には殆ど觸れず、また在來の歐米學者の所説にも盲從してゐない。先づ殷代史料として甲骨文の研究、殷虛發掘の經過を述べ、殷代の文獻として普通知られてをる詩書中の諸篇を批判し、之が悉く後出のものなることを論じ、結局殷代の研究には殷虛出土物、その中でも甲骨文が最も重要な史料なることを述べ、次いで第二編「夏は存在せるや」の章に於て、夏朝の物語は恐らく周朝が自己の征服行爲を正統化し、殷人を從屬せしめんが爲作爲した政治的宣傳の所産ならんとし、然しその夏朝の存在は全く假空のこととは思はれず、「夏」と云ふ名辭が詩、書、左傳、國語中に於て支那文化を持つ諸國を表はす爲用ひられ居ることに注意し、黄河の下流々域、北東支那に曾つて夏朝の存在せる事を推し、たゞその證據を缺くと論じ、第三篇「商とは如何なる民族なりしか」に於て、商人は盤庚の時分から周朝の興起まで安陽を占めて居り、恐らく石器時代人と同じく廣義の蒙古系種族であり、その文化は石器時代文化の繼續であり、恐らく黑色土器文化に青銅時代の或種の技術の接合せるものなるかも知れずと云ひ、よし青銅技術が外部よりの輸入にしる殷人は之を古今無比の優良製作品を生むまで改善せることを認め、その文化の親縁は之を西方に求むべきよりも寧ろアメリカか太平洋州に求むべきことを論じ、支